

☆佐々木良作元委員長逝去

☆ゼンセン同盟日本初の介護クラフトユニオン結成

☆拉致家族コメ支援に抗議し座り込み

第64号 2000年4月1日

(平成7年3月17日第三種郵便物認可)

編集発行人 真鍋 貞樹
〒105-0003 東京都港区西新橋1丁目20番9号
和田ビル4階
TEL (03) 3501-5111 毎月1回1日発行
購読料 年間 2,000円
(会員の購読料は会費の中に含む)

佐々木良作民社党第4代委員長逝去

民社党元中央執行委員長の佐々木良作協会顧問は、かねてから療養中のところ、3月9日午前零時、心筋梗塞のため東京の東京電力病院で逝去された。享年85歳。

通夜(12日)、葬儀(13日)は東京・吉祥寺で行われ、訃報を聞いて通夜に駆けつけた米沢協会会長ら多くの関係者が弔問に訪れた。

佐々木元委員長の政治家としての生涯は、日本の政治に不毛の対決と馴れ合い政治をもたらした55年体制を打破し、与野党が真に競い合う議会制民主主義を確立するための闘いの歩みであった。一貫して、時の政権の権力主義的姿勢を厳しく批判し、与野党の話し合いによる政治の実現に尽力するとともに、一党支配体制を打破するための政界再編を追求し、今日の連立・連合政治時代の礎を築いた。

故 佐々木良作元委員長のおゆんだ道

生い立ち

- 大正4年1月8日、兵庫県に生まれる。
- 昭和14年3月、京都帝国大学法学部を卒業。
- 昭和14年4月、日本発送電株式会社に入社。
- 昭和21年1月、日発全国従業員組合書記長、22年2月、日本電気産業労働組合書記長を歴任し、戦後の労働運動の先頭に立つ。
- 昭和27年9月、電源開発株式会社の設立に参画し、翌年7月、総務部長に就任。わが国の最大級水力発電所である佐久間ダム、御母衣ダムの建設など戦後日本の電源開発に貢献。昭和29年7月、同社を退社。

政治歴

- 昭和22年4月、参議院全国区に第8位当選。
- 昭和30年2月、衆議院兵庫第五区より初当選。以来、連続12回当選。
- 昭和35年1月、民社党結党に参画。教宣局長、副書記長、国対委員長等を歴任。
- 昭和44年2月、民社党書記長に就任。
- 昭和50年2月、民社党副委員長に就任。
- 昭和52年11月、第四代の民社党中央執行委員長に就任。
- 昭和60年4月、民社党常任顧問に就任。
- 平成2年2月、衆議院議員を引退。
- この間、昭和53年11月に南北問題日本委員会、昭和64年10月に地球環境・エネルギー問題委員会をそれぞれ創設し、主宰する。

栄誉歴

- 昭和48年12月、在職25年永年在職議員として衆議院より表彰される。
- 昭和60年4月、勲一等旭日大綬章を授与される。

著作

- 学生時代から俳句を愛し、良素の排名で『野分』『桐若菜』『烏雲に』の句集を刊行。『平成俳人代表作全書』『現代俳人短冊全書』『平成俳人大全書』第五巻にもその作品が収録されている。
- 『小田原日記』(昭和55年、日本経済新聞社)。その他、『一票差の人生 佐々木良作の証言』(平成元年、朝日新聞社)がある。

最後のお別れ しめやかに

佐々木元委員長の葬儀は3月13日、佐々木家・電力総連・民社協会の合同で、



文京区の諏訪山吉祥寺においてしめやかに執り行われた。葬儀委員長を務めた中野寛成協会副理事長を始め、委員長時代の総理である中曽根康弘元首相、電力総連の妻木紀雄会長、地元後援会の河合寛代表らがそれぞれ弔辞を述べ、故人を偲んだ。

参列者は、政界からは協会所属の国会議員、伊藤宗一郎、斎藤十郎衆参両院議長、森喜朗自民党幹事長、鳩山由紀夫民主党代表、羽田孜同党幹事長、石田幸四郎公明党常任顧問、土井たか子社民党党首や各党の元国会議員、労働界では鷲尾悦也連合会長、天池清次元同盟会長や各産別幹部らが参列、また地元後援会や旧民社党書記局員など700名が訪れ、佐々木元委員長に最後の別れを告げた。

中野寛成合同葬儀委員長弔辞(要約)

先生は、戦後日本の民主的労働運動の傑出した指導者であり、わが国エネルギー産業の基盤を築かれた先駆者、政界にあっては自社なれ合いの55年体制の打破、政権交代可能な野党づくりのための政界再編を推進され、今日の連立・連合時代の礎を築かれた。政治にロマンを与え、政治倫理の高揚を唱え、悲壮感に満ちた憂国の弁舌を繰り広げられた。

先生は戦後、日発全国従業員組合書記長、電産の書記長として嵐のような戦後労働運動を指導された。昭和22年4月の新憲法下初の参議院選挙で全国第8位の高位当選。昭和30年2月の総選挙に初当選以来、連続12回当選。41年の長きにわたり、戦後わが国の議会政治に大きな足跡を残された。昭和35年1月の西尾末廣氏を中心とする民社党結党に参画された先生は、民社党苦難の歴史の中で、教宣局長、副書記長、国会対策委員長、書記長、副委員長として重責を果たされ、昭和52年11月、春日委員長の後をうけて委員長に就任、民社党のリーダーとして活躍された。自民党一党支配を崩し、政権交代可能な体制づくりに政治生命をかけた。

先生の人柄は、秋霜烈日、武士のような激しい性格の反面、友人、家族をはじめすべての人を愛し、自然を愛する温かさに溢れておられた。俳句に造詣が深く、また、書もよくされた。

今、先生を尊敬してやまなかった民社協会の全国の同志、電力の仲間、先生の選挙を支えた但馬の後援会の方々、親しかった友人知人のすべての人々が、先生の霊前に立ち別れを告げている。われわれは、それぞれの立場で先生の志を引き継ぐことを誓います。

